救世軍公報

GOOD NEWS
ときのこえ

War Cry

1月号
福音版
2020
January
No.2794

二〇二〇年　一月一日　発行

明治二十八年創刊　福音版・毎月一日発行　広報版・奇数月十五日発行（除く七月）

創立者　ウイリアム・ブース　大将　ブライアン・ペドル（万国本営　英国ロンドン）　日本司令官　ケネス・メイナー（救世軍本営　東京都千代田区）

http://www.salvationarmy.or.jp

唯一の道―イエス・キリスト

司令官　ケネス・メイナー

一人の男のお話です。

ある日、彼が飼っていた馬が逃げました。そのニュースを聞いた隣人たちは彼を訪ね、「不運だったね」と言いました。その同情の言葉に、男は「そうかも」と答えました。

翌朝、逃げた馬は三頭の野生馬を連れて帰ってきました。「なんてすばらしいことだ！」と隣人たちは大声で男に言い、男は「そうかも」と答えました。

その翌日、彼の息子が野生馬の一頭に乗ろうとして振り落とされ、足を骨折しました。二度目の不幸に対して同情の言葉をかける隣人に、男は「そうかも」と答えました。

翌日。軍の役人がやって来て、村の若者を軍隊に連れて行こうとしました。けれども、骨折している男の息子を見て、通り過ぎて行きました。隣人が、男と息子に祝福の言葉をかけると、男は「そうかも」と答えました。

このお話をあるところで紹介したところ、多くの反響が寄せられました。

「良い状況が悪い状況からもたらされることがあることを知って、ほっとしました。でも、悪い状況が良い状況にも起こるという事実に直面するのはうれしいことではないから、一概に良い、悪いと言い難いですね」、「すべてが何らかの理由で起こるので、何が起こるのか、これから先のことを心配してもしようがないですね。心配せず、幸せでいましょう！」、「状況で判断せず、結果を待つことですね」。また、「男は隣人に同意することで自分自身を縛りたくなかったのでしょう」という分析もありました。最後に「この男は実に口数少ない男だ！」とのコメントもありました。

多くの人々は、人生というものは幸運か不運かの二択であるような、否定的な考え方をします。けれども、人生は幸運かそうでないかというものではありません。

人生には、もっと良い生き方があります。それは、愛、平和、喜び、そして、明確な目的が実現していくことを経験する人生です。イエス・キリストとの関係をもつことで、このような人生を送ることができます。

イエス様は、

「わたしは道であり、真理であり、命である」（ヨハネによる福音書14章6節）

と言われました。

ある人々は、天国に到達するための道は一本ではなく何本もある、とあなたに伝えようとするかもしれません。また、聖書の神以外にも他の神々がいるではないか、と言うかもしれません。

しかし、人間の歴史において、愛のために十字架で死なれた方は、イエス様お一人です。二度と死ぬことのない新しい体で、死から復活された方は、ただお一人、イエス様です。イエス様だけが本当の神様であられました。そして、イエス様を信じる人は、誰でも、愛、平和、喜び、そして明確な目的を実現に至らせる人生を新たに手に入れることができるのです。

他の宗教指導者はだれも、死から復活していません。彼らは、墓に納められました。しかし、イエス様は、墓の中にはもうおられません。墓から復活され、新しい命をいただいたのです。そして今は、イエス様を信じ、信頼するわたしたちを迎える備えをするため、全世界の王として天の王座に座しておられます。

イエス様は、人間が神様と良い関係をもつための唯一の道です。人間が、神様との良い関係をいただくためには、まず、イエス様を信じなければなりません―「道」であると言われたイエス様を、「真理」であると言われたイエス様を。

イエス様についてもっともっとお話をするために、あなたとお会いすることができれば光栄です。

神様があなたを豊かに祝福してくださいますようにお祈りいたします。

（救世軍士官〈伝道者〉）

Photo credit: Brett Jordan on Visualhunt / CC BY

WINDOWS on the ARMY WORLD　世界をみつめて

〈バチカン〉ブライアン・ペドル大将とフランシスコ教皇の対話

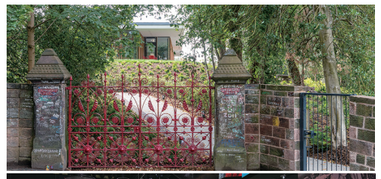
2019年11月8日（金）、救世軍の万国総督ブライアン・ペドル大将とロザリー・ペドル中将夫妻及び救世軍の代表一行は、フランシスコ教皇との対話のためバチカンを訪問しました。

温かい雰囲気の中、ペドル大将は、救世軍とローマ・カトリック教会が貧しい人々と疎外された人々への働きに共通の課題を有していることを強調し、教皇と共に祈る時をもちました。

教皇からの救世軍への書簡には、教皇がエキュメニズム（世界教会主義）の最初のレッスンを受けたのは、4歳の時に救世軍のメンバーと出会った際、祖母から、救世軍の謙虚な奉仕はどんな言葉よりも多くを語っている、と言われたことにあると記されていました。また、互いに尊敬し合い、聖なる生活と若者へのアプローチを強調すること、ローマにおける街頭生活者支援、人身取引やその他の現代の奴隷制との闘いに救世軍が大きく関わっていることなどへの感謝が書かれていました。

〈英国〉ストロベリー・フィールドに新しい施設が開所

9月14日（土）、ビートルズの「ストロベリー・フィールズ・フォーエバー」で有名になった、救世軍の児童養護施設跡地に、地域に開かれたカフェと学習障害児の就労支援施設が完成し、一般公開されました。庭園とビートルズ関連の体験型展示もあり、注目を集めています。また、11月12日（火）に、公式の開所式が英国の救世軍司令官によっておこなわれました。



〈日本〉台風の被災地への支援活動

10月12日（土）、台風19号は、関東地方、甲信越地方、東北地方等に甚大な被害を出しました。救世軍は、栃木県佐野市において、小隊（教会にあたる）及び保育園関係者が中心となって支援活動をしました。広範囲からのボランティアと共に、翌日から避難所や施設に支援品を届け、汚泥の除去作業や災害粗大ゴミの搬出、佐野市役所に罹災証明書の手続きに来られる方々のためのコーヒーサービス等をおこないました。いくつかの支援を、ワールド・ビジョン・ジャパン様、株式会社田島建設様が応援してくださいました。

その他、長野県、神奈川県でも支援活動をおこないました。

救世軍とは？ What is The Salvation Army?

心は神に　手は人に　Heart to God, Hand to Man

救世軍は、英国ロンドンに国際本部を置く、世界131の国と地域で活動するプロテスタントのキリスト教会です。1865年、英国のメソジスト教会の牧師であったウイリアム・ブースによって始められ、家のない人々、仕事に就けない人々、アルコールの悪影響下にある人々、搾取される女性や顧みられない子どもたち、災害に遭った人々などに助けの手を伸べつつ、神様の愛を伝えてきました。

日本での働きは、1895（明治28）年に始まり、伝道の拠点である小隊（教会にあたる）を開設。廃娼運動、失業者対策、病院や結核療養所の設立、児童や女性の保護、アルコール依存症者回復支援など、時代にさきがけて、様々な働きを興してきました。日本人で最初に救世軍士官（伝道者）となったのは山室軍平です。キリスト教界だけでなく、社会福祉分野における先駆者の一人にも数えられています。

昨年末、各地の街頭でおこなわれた救世軍社会鍋にお寄せいただいた献金によって、年末年始にかけて救世軍のある地域の作業所や施設への支援や、街頭生活者支援がおこなわれました。昨秋には、台風による被害を受けた地域のための臨時社会鍋も立てられ、多くのご協力をいただきました。

発行日及び定価
▼発行日
福音版・毎月一日発行
広報版・奇数月十五日発行（除く七月）
▼定　価
福音版・一部　四〇円
広報版・一部　一〇〇円
クリスマス特集号（十二月一日号）・一部　一〇〇円
振替・〇〇二八〇―五―四四〇〇
発行兼印刷人　救世軍　代表者　ケネス・メイナー
編集人　寺澤　眞由子
〒101―0051　東京都千代田区　神田神保町二ノ十七
電話　東京(03)三三七〇八八一
発行所　救世軍本営
印刷所　ピーアンドエス

（取扱支部）

救世軍は、統一協会、エホバの証人、モルモン教ではありません。これらの問題でお悩みの方は、右救世軍にご相談ください。

聖書は新共同訳を使用しています　©共同訳聖書実行委員会 ©日本聖書協会

信仰の体験談
証言のページ

キリストを知る

Revolution Hawaii 参加者
山谷　愛加
石川　眞

「ALOHA!」ハワイで私の人生観は180度変わりました！

山谷　愛加

昨年八月、約一年間の訓練プログラムレボリューション・ハワイ（略称・レボハイ）から帰って来ました。濃密な一年を過ごした仲間と離れ離れになって寂しい気持ちが強いですが、どこにいてもイエス様を信じる家族であるということを胸に日々過ごしています。

レボハイは、私の人生観が180度変わる経験でした。それまでの私は、両親が救世軍の士官（伝道者）なのでたくさんの人に囲まれる中で育ったのですが、めんどうくさがりで、シャイ、他人を外見や匂いで判断してしまうことが多く、何事に対しても優先順位はいつも自分自身という感じでした。神様やイエス様がおられるのは自然なことでしたが、自分の救いについて聞かれるのはちょっと苦手でした。

二〇一七年、レボハイから宣教チーム（写真右下）が初めて日本に来ました。彼らの活動や自由時間を一緒に過ごす中で、メンバーがいつでも聖書を読むことを大切にしていて、熱心に祈っている姿をかっこいいと思いました。

私もそういう生活をしたい、レボハイに参加したい、と思うようになりました。すると、二〇一八年に応募できることになり、レボハイが日本で良い働きをしたので、日本の救世軍が参加費などサポートしてくれることになりました。

レボハイでは、自分自身の「救い」を確信することができました。自分はクリスチャンの家に生まれてイエス様について知ることができたけど、この世にはたくさん知らない人がいる。もし私が士官の家に生まれていなかったら、まだイエス様のことや、その深い愛を知らなかったかもしれないと考えたときに、私は救われているんだ、と確信することができました。

レボハイのモットーは、イエス様が私たちを愛しているように、私たちも隣人を愛するということです。地域のコミュニティに出て行き、人々と関係を深める機会が毎日ありました。特に一番多かったのが街頭生活者に対する働きかけでした。毎週日曜の夜にピーナッツバターとジャムのサンドイッチをつくり、町に出て配りました。最初の一カ月半位は、話したり、ハグ（挨拶として抱き合う）や、地面に座っている方と一緒に座ったり、自分から声をかけたり、ということに偏見や恐怖心がありました。なので、メンバーの横で見ていたり、他のボランティアの人と話したりしていることが多かったです。でも、だんだん街頭で生活する人々に触れていくうちに、彼らの優しさや内にもっている希望を知り、彼らも神様の大切な子どもの一人であり、私の兄弟姉妹であることを学びました。その時から、人を外見で判断することをやめ、しっかりと街頭生活者への働きに向き合うことができました。そんな自分に気づけたのも、イエス様が私に隣人愛を教えてくださったからだと思います。街頭生活をしていた女性のためのシェルターでの働きも経験し、女性や子どもと関わる喜びも経験しました。日本でも女性のための働きをしたいという思いも抱いています。

レボハイの訓練の最後にサマーミッションチームのメンバーとして宣教活動をしました。その一環で、バハマで五日間のキャンプに参加し、賛美や、工作や聖書のお話を導いていくうちに、喜びを感じ、また自分の自信につながりました。日本でも楽しく子どもたちに神様のことを伝えたいし、青年が子どもたちに神様のことを伝えるお手伝いをしたいと思っています。

帰国して、街頭生活者への支援にも参加するようになりました。「怠らず励み、霊に燃えて、主に仕えなさい」（ローマの信徒への手紙12章11節）と聖書の言葉に励まされて、もっともっと伝道したいと模索しています。

（救世軍渋谷小隊所属）

自己中心の生き方から、神様中心の生き方をしたいと思った時から……

石川　眞

私も両親が救世軍士官だったので、ごく自然に神様、イエス様を信じていました。けれども、二〇一五年に英国で開催された救世軍の創立百五十年を記念する大会での祈りの時間に、自分の自己中心的なことが示され、悔い改める祈りを献げました。同時に、神様から「これからあなたを使う」という声を聞いた気がしました。その時が、自分の本当の意味での救いの始まりでした。

大会の一カ月後に、救世軍の兵士（信徒）になりました。それからは、神様中心の生き方をしたい、と思うようになり、神様からの招きに「はい」と答え続ける中で、海外でおこなわれる救世軍のキャンプなどに参加し、たくさんの学びや経験ができました。

英語の教員免許を取得した私は、二〇一八年春の大学卒業時には、もっと英語を身につけたいと、半年後からの留学資金のためにアルバイトを始めていました。そんな中、周りの方の勧めでレボハイの募集を知り、締め切りギリギリで応募したところ採用されました。

レボハイは「弟子訓練」という肩書をもったプログラムなので、十八人（男性3人、女性15人）のメンバーとのキャンプ場での共同生活でした。お金の使用と恋愛は禁止。携帯の利用は週一日のみという質素倹約の厳しいルールがあります。

「この時、この瞬間、イエス様と人を愛するために何ができるか」をモットーに、神様とコミュニティとの関係を近づけるために時間を費やしました。貧困層が集まる団地付近の公園での聖書の学びなどもとても意義深いものでした。

基本的に、午前中は信仰成長のために時間を割き、聖書全巻通読を目標にしたデボーション（聖書を読み祈る時間）、読んだ聖書箇所についてのディスカッション、暗唱聖句、祈り会、講師を招いての授業、信仰書の読書とディスカッションなどがありました。

神様は、それらからまず、自分の信仰の弱さを明らかにしてくださいました。御言葉の力強さを実感させてくださり、それまで、神様を求めて神様と共に過ごす時間が足りていなかったことにも気づかされました。神様がもっと自分と話す時間が欲しい思っておられること、恵みとして愛してくださる神様の赦しの偉大さを思い知らされました。

初めの二カ月ほどは一人ひとりが、長い人では一時間以上かけて人生の証言をしました。人生の過ちや傷を告白し、涙を共に流す中で、イエス様がお互いの弱さを用いて、お互いを繋げてくださる喜びと、イエス様によって互いに固く一致する経験をしました。

聖書を章単位で暗唱し、一番長いものではマタイによる福音書五章の山上の説教を暗唱しました。覚えた言葉が頭でなく心に結びついた時、御言葉が自分の内なる人を強めてくれることを感じました。特にコリントの信徒への手紙一三章は人への愛の示し方を、ヤコブの手紙一章は試練への対処の仕方を変えていきました。聖書こそがあらゆる状況の光となる究極の真理だと気づくことができました。

祈りについて自分の思いがからりと変えられる経験もありました。メンバーの肩の痛みが、みんなの祈りによって癒され、またコミュニティで出会った、ずっと祈ってあげていた方々が家を手に入れたり、テントを手に入れたり、家族と連絡が取れるようになったりと祈りが大きな力であることを神様は教えてくださいました。またある夜、あることで悲しみに暮れていた時に、祈りによって平安が心の奥底からあふれ出てくる経験もしました。

私は毎週、救世軍のアルコールや薬物依存症の回復支援施設へ通い、共に賛美や祈りの時をもちました。そこで出会ったある方は、アルコールと薬物が原因で家族との関係が絶たれ、入所されていました。彼と共に祈って過ごす中、訪れるたびに、母と連絡が取れた、母が赦してくれた、等の報告を聞いていました。施設卒業時にお母様が来られ、彼が、「ここで神様に出会わなければこんなことはなかった。私は神様とお母さんを愛しています」と言うと、お母様も「私も愛しているよ」と答えるのを聞き、私は、神様がもたらした和解の御業をそこに見ました。

レボハイで共にいてくださった神様は、今も私の力になってくださっています。帰国後、街頭生活をしている方に時々声をかけ、自分の通う小隊（教会にあたる）でいつか神様に出会っていただけるよう、祈りながら備えています。

「愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない」（コリントの信徒への手紙一13章4節）と聖書にあるように、神様の愛が私の原動力です。

また、神様中心の生き方を始めてから、神様はたくさんの出会いを与えてくださり、不思議な形でその出会いが繋がっていくことを経験しています。自分の存在や自分の奏でる音楽が、人と人、神様と人とを繋ぐ橋のような存在になることができればと思っています。

（救世軍江東小隊所属）

上左・毎週日曜日、街頭生活者に届けるためのサンドイッチをつくった
上右・街頭生活をしている方との対話
下左・毎週、アルコールや薬物依存症の回復支援施設で礼拝を導いた（左端 石川）
下右・バハマでの子どものキャンプで（最前列右から２人目 山谷）

キリトリ

□私の近くの救世軍を紹介してください。
□キリスト教についてもっと知りたいです。
□『ときのこえ』の購読を申し込みます。

ご氏名
ご住所

この部分を封書か葉書に貼り、裏面下の救世軍にお送りください。